

『伝書』にみる礼儀の心と形を 「秘書実務」教育に生かすための実践的研究

島田 洋子

要 約

戦後、著しい発展をとげた日本の経済は、物質的豊かさをもたらし、人々の価値観も大きく変化してきた。その中で、心の豊かさや、人間としての温かい気持ちの交流が稀薄になってきたことに、家庭、教育、職場、その他あらゆる分野で憂慮され、取り上げられている。洪水のように押し寄せる情報の中で、何を選びとって進むべきかの価値判断の基準さえも見失いそうな現状である。ここでは、秘書実務教育という立場から、歴史のなかで育まれてきた、日本の礼儀作法の『伝書』をひもとき、日本人の礼儀の心と形との関係を考察し、現代に失われつつある心のありようを探り、新しい時代に即応した和やかな人間関係を育み、心のこもった職務遂行ができるように、実践に即した研究をまとめた。

キーワード

小笠原流 伝書 秘書教育 挨拶 みだしなみ 美意識

はじめに

わが国の長い歴史の中で生まれ、伝えられてきた礼儀作法とその思想は、第二次世界大戦の敗北の結果、大きな変革をみることになった。すなわち、人権尊重、平等の原則により、封建社会における上下の秩序を肯定する作法が相入れないものとして置き去られる傾向にあったのである。また戦後、生きることに追われてきた生活の中では、礼儀とか躰などに気持ちを向ける余裕はなかった。そして、経済復興へとかり立てられ、やがて驚異的な高度成長をとげることができた経済は、めまぐるしい社会変化をもたらすことになった。物質的豊かさの中で、時代は移り変わり、風俗、習慣、価値観も大きく

変化した。

しかし、物の豊かさ、便利さの反面、なにか大切なものを失っているのではないだろうか、人々がお互いを支え合う人間的な触れ合いが稀薄に感じられるのはなぜだろうかという疑問が出てきたのである。

現在、心の豊かさや、人間的なあたたかい思いやりの気持ちなど、人間が人間として一番大切な心のありように問題があることは、多くの人々が気付いているところである。

今日、職場や家庭、教育の現場、その他あらゆる分野でその弊害が表面化し、取り沙汰されているが、解決への道は未だ混沌としている状況である。ここでは、職場に於ける、殊に秘書

実務教育の立場からそれらの諸問題をとらえ、いかに心のこもった対応ができ、あたたかい人間関係を築くことができるか考えていきたい。

職場は、日本特有のタテの枠組みの人間関係でなりたつ管理社会になっている。そうであれば、上下の枠組みの中でなりたってきた旧来の慣習や礼儀を、もういちど見直してみる事も無駄ではないであろう。ますます国際化の進む中で、私たちは日本人としてどの様に考え、どの様に人間関係を培い、行動していったら良いのかを知るために、日本の礼儀作法やしきたりを学び、現代に生かしていくことは大切な事である。

礼儀作法といえば、小笠原流を思い浮かべる人も少なくないと思うが、ここでは日本の礼法の中核をなしてきた小笠原家に伝えられ、公開されている「伝書」をひもとき、伝承されてきた日本の礼法の形式と内面の心の問題の関係について、具体的な例をあげながら、現代に失われつつある心の部分を探りたいと思う。そこでは、日本人の細やかな心遣いによる相手を思う気持ちがあってこそ初めて作法という形ができていることを随所で知らされる筈である。

1 小笠原流礼法の形成過程と伝書

まず、小笠原流礼法がどのような歴史的過程を経て出来上がってきたのかについて簡単に述べてみたいと思う。

小笠原家は清和源氏の流れをくみ、八幡太郎義家の弟で武勇で名高い新羅義光を祖とする甲斐源氏である。源平の内乱に戦功をたてた遠光の子、長清（応保2-仁治3）は、源頼朝に仕え弓馬術に優れていて、高倉天皇から小笠原の号を賜り、小笠原家の始祖となった。

小笠原家では弓馬の法を「糾方」と呼び、代々嫡子に伝えたが、長清から六代後の貞宗のときに、糾方に礼法が加えられ、弓・馬・礼の三法をもって小笠原流礼法が現代へとつながる基盤が出来上がった。貞宗は（永仁1-貞和3）足利尊氏後醍醐天皇に弓馬の秘伝を伝授して「小笠原は日本の武士の定式たるべし」という御手判とともに、家紋として「王」の字を賜った。しかし王の字をそのまま家紋にするには恐れ多いとして三階菱の形にしたという。

貞宗から四代後の長秀（貞治5-応永31）は、足利義光の命を受け、武家礼法の古典といわれている「三議一統」を伊勢家、今川家と共に編纂した。しかし、伝書に記されていないながらも「三議一統」の選述を確認できる当時の資料は、必ずしも明らかではないようである。

その後弓馬及び礼法からなる糾法について、積極的にその故実を研究し、名実ともに小笠原礼書を大成するのは、信濃小笠原氏、長秀から八代後の長時とその子貞慶であった。貞慶（天文15-文禄4）は、武田信玄に奪われていた信州松本の領地を回復して家康の旗下に入った。この時、嫡男の秀政（永禄12-元和1）に伝授した礼法書が「小笠原礼書七冊」と呼ばれる伝書類である。この「七冊」は戦国の戦乱を経て、徳川の安定期に至るまでの時期に集大成された礼書で、武家の質朴な礼の本義というべき性格を示している。（この伝書は現代になって第32世主小笠原忠統氏により解説され研究されている）

やがて大阪夏の陣で、秀政は、長男と共に壮烈な戦死を遂げ、次男忠真も負傷したが、その功により忠真は、松本から明石十万石を経て、豊前小倉十五万石の領主となった。

江戸時代の小笠原家は、代々将軍家の礼法指南を司っていたが、世が平和になるにつれて礼法への関心が高まっても一子相伝、しかも将軍家の「お止め流」として市井に広がるということとはなかった。そこで町方に小笠原流と称して礼法を教授する浪人や御家人が多く輩出した。しかし、「お止め流」のため、そのまま伝える事は許されず、平和な時代の風潮に合わせて華美に流れた礼法が、自称小笠原流の師範により普及した。

明治になると、これらは作法教育として女学校などで取り入れ教えられたが、形にとらわれた堅苦しい印象にとらわれてしまっている感をぬぐえない。しかし、本来小笠原流では「すべてのことは心より発して心におさまる」として形だけを強いる作法教育を強く否定しているのである。すなわち、本来の『伝書』にもどって研究していくと、現在の混乱した社会情勢の中で必要とされ、見直されている礼儀作法の方向性を見いだすことができるのである。

ここでいう『伝書』というのは、上述の歴史にみるように、小笠原家が編纂し、守り伝えられてきた礼儀作法書のことである。一子相伝で、厳しく伝授されたものであるが、戦国の世にあって、そのみでは、伝授が絶えてしまう危険もあり、家臣に伝えることもあった。流儀の秘伝を正しく継受しようとする熱い思いを、代々の当主が受け継ぎ、今日まで伝えられたと言う事に、畏敬の念を覚える。これらの礼法書は、あらゆる事を網羅してあるが、一部代表的なものを紹介しておくことにする。

「三議一統」は武家礼法の古典と言われている。内容は、十二門に分けられているが、参考までに名称を上げてみよう。

統為家門 法量門 騎射門 歩射門 供奉門
宮仕門 奏対門 馬法門 蹴毬門 饌部門
筆法門 実検門 以上である。

「小笠原礼七冊」(1592)は、信濃守小笠原貞慶により大成され、秀政に伝えられたもので、七冊に分かれている。

元服之次第(婿・嫁取之次第を含む) 万膳方之次第 通い之次第 酌之次第 請取渡之次第 書礼法上・下 以上である。

その他、「包結図説」「九草子」「馬書拔書」「口伝集」「聞書」「当家極秘伝書」など、まだ公開されていないものが数多くある。

『伝書』はすなわち、朝起きてから寝るまでのこと、誕生から死ぬまでのこと等、全てにわたって書かれているのである。

2 小笠原流伝書の思想と秘書教育

現在、冠婚葬祭の手引きやマナー書は数多くあり、形式は学ぶことはできるが、なぜそうしなければならぬかというところまではなかなか答えてくれない。ところが小笠原流の『伝書』は、こうした一つ一つの動作にいたるまで、体系的に組み立てられた解答を示してくれる。長い歴史を乗り越えて今日まで伝えられたということは、それが必要とされており、また多くの人に認められた合理性があるからに違いない。「温故知新」現代人に求められている礼儀の心を少しでも示唆できる手立てになればと考え、実践的研究を志向した理由はそこにある。

秘書とは、「上司が、本来の活動を能率よく行われるように、対人業務や情報業務の両面からサポートするもの」と定義されている。秘書は、上司の本務の補助から雑務処理まで、多岐にわたる業務を、きめ細やかにこなさなければ

ならない。

そのためには、的確な状況判断により、洗練された動きが要求される。それには、自分の立場からだけで物事をすすめるのではなく、相手の状況を理解したうえで行動する習慣をつける必要がある。思いやりのあるさりげない心遣いが大切になってくる。ここでは、数多い秘書業務のなかから、接遇・慶弔の章から抜き出し具体的に、考えていきたいと思う。

接遇 接遇の心構え

- (1) 誠意をもってする
- (2) 適切な処理をする (正確・迅速・公平)
- (3) 感じのよい態度をとる

ア 服装・化粧

イ 姿勢・動作

ウ 言葉づかい

エ 状況にあった柔軟な対応をする

秘書にとって必要な心構えを簡単にまとめてあるが、まずここから必要なことを選択して考察することにしたい。

人生は出会いによってきまるなどと言われるが、人と人との出会いは、挨拶ではじまると言っても過言ではないであろう。毎日道ですれちがう人も、挨拶をしなければ知らない他人なのである。ふとしたきっかけでも、挨拶を交わしたならば、そこに出会いが生まれるのである。それは、たった一度の出会いであるかもしれない。それならばなおさらのこと、「一期一会」の教えにもあるように、とても大切な場面になってくる。秘書実務の対応においては、相手はいつも人なのである。その初めの挨拶に誠意が感じられないと、迎える気持ちも十分に伝わらず、適切な対応とはいえないので、その後の職務に

も支障をきたしかねない。それでは、実際に即して考えてみよう。

挨拶のかたちはそれぞれの国によって様々である。国際的に共通の形が無いとすれば、自国の挨拶の形を身につけることが、国際的にも通用するのである。留学先でそれぞれ違う国の人と文化交流をする会が開かれたとき、まず挨拶の形から入ったという。その時初めて日本のお辞儀のかたちを意識してみて、正確にはどうするのか、はたと困ってしまったと言う話を聞いたことがある。

またある時、私のところに、「実は、カナダの人と結婚することになったのですが、日本人として必要なことを身につけたいので教えていただけますでしょうか」と、電話がかかってきた。よく聞いてみると、後半年しかないという。このように国際的視野にたったとき、日本人が日本人として知らなければならないことに目覚めたのである。それからの半年の間の彼女の努力はすばらしいものであった。

その折彼女から聞いた話によると、カナダのご両親がお見えになったとき、日本に来て何に関心があるか聞いてみたら、大きなデパートへ行って、開店のとき店員が並んでお辞儀をするのを見たいと言ったという。それから彼女のお辞儀への関心が高まったのであろう。このようにみていくと、お辞儀一つ覚えても、国際交流ができるのである。今企業は、著しい国際化の時代を迎えている。このような視点からも、職場においても日本人としての挨拶の形、お辞儀を正しく学ぶことが必要である。

3 秘書教育における挨拶の形と心

お辞儀には、座礼(座ってするお辞儀)と立

礼（立ったままのお辞儀）がある。職場においては、立礼が主になるので、立礼に焦点を当てて見ることにする。

まずは形から入っていくことになるが、それは相手に対する気持ちをいかに表現して伝えるかというところから発生していることを忘れてはならない。こころの表現方法として、基本的な立ち振る舞いという形式が生まれてきたのである。それは長い歴史のなかで改善し、無駄を省き、合理性に富んだ動きになっている。

(1) 立った姿勢

まず、上体を真っ直ぐに伸ばし、背骨が腰に刺さるように据える。首は前後左右に傾かず、両耳が肩に垂れるよう、顎を引き気味にする。口は軽く結び、口の中で舌を上の方につけると、唇のしまりが良くなる。手は緊張せずに自然に垂らせば良い。視線は三メートルくらい先の床を見、足は、女性の場合は揃えると美しい。緊張しすぎて反りすぎたり、また気が抜けて背を丸めた姿勢は、疲労をきたすし、周囲の人にも良い感じを与えないものである。

小笠原流の弓道の教えの胴作りの伝書には、「胴は只、常に立ちたる姿勢にて、退かず、掛からず、反らず、屈まず」という数え歌が残っている。－姿勢を正す－という言葉が精神のありようを言い表す言葉として使われていることをみても、形と心が、一体であったことがわかる。

(2) 立礼の種類

会釈 正しい姿勢をとり、背筋が真っ直ぐに伸びた上体をそのまま15度位前傾させる。頭だけがうなだれたようになるのは、だらしなく感じられるので注意したい。手

は自然に脇から前におろすとよい。指先を少し緊張させるとひき締まって美しい。

敬礼 正しく立った姿勢をとり、息を吸いながら前傾していき、傾きをとめた時点で息を吐き、動作を止めて間をおく。心をこめるのにこの間が大切なのである。そして息を吸いながら上体を起こしもとの姿勢に戻る。前傾角度は30度から深くても45度までである。視線は自然に動きに合わせてればよい。

最敬礼 45度以上90度の礼をいう。日常的にはここまで深くすることは少ない。

お辞儀はこのような形をとり、敬意や感謝、親しみの気持ちを相手に伝える行為である。

「礼三息」といわれ、息を吸いながら上体を前傾させ、止めたところで息を吐き吸いながら戻るといった動作があり、この時お互いの息遣いがきれいに合って、心が通い合うのである。そのためにはタイミングが大切になってくる。－あの人とは息が合う－などといわれて、気持ちの通い合う意味に使われている言葉も、やはりここから出ているのであろう。

伝書に「人に式対（おじぎのこと）のこと、さのみ繁きは返りて狼藉（無礼）なり。…」とあり、また「礼三度に過ぐべからず」「万事に礼深くすること慮外なり」とある。

お辞儀のし過ぎは、相手に対して失礼になるとし、またお辞儀も、いつも深くすればよいというものではなく、時と場合に合わせ動作していくことを教えている。その場その場に相応しいお辞儀の形がとれて、はじめて自然な心の交流ができるのである。

伝書の数え歌では、「手も足もみな身につけてつかうべし離れば人の目にや立ちなん」と自然で目立たないようにさりげなく相手への心遣いすることを教え、行動の美学へと高めている。

(3) 座礼の種類

日本の生活様式は、古くは座敷だったので、座礼のかたちの種類は多い。座礼は九品礼といって、目礼、首礼、指建礼、爪甲礼、折手礼、拓手礼、双手礼、合手礼、合掌礼がある。ここでは、簡単に紹介するだけにとどめるが、これらは、お辞儀の深さによって分けられているのである。この中から目礼を取り上げ、礼と心の関係を考えてみることにする。

目礼は、一番軽い礼でありながら、目だけで礼の心を表すというのは、形がないのでとても難しく、気持ちがこもらないと伝わらないのである。しかし座礼に限らず、どんな礼にはいるにも、まず相手の目を見ることから始まる。一目は口ほどにもの言う一といわれるように、目は人間の感情を正直に伝えるものである。どんなに正しい姿勢ができて、目に表情がなかったり、やぶにらみであったり、敵意が感じられたりしたら、相手に不信感を与えることになる。たとえ相手に対してそんな気持ちを持っていないとしても、そう思われてしまうのは当然である。感じの良い応対をするには、にこやかな、穏やかな、直ぐなるまなざしで迎えたいものである。それには、心から迎え入れるあたたかい気持ちを持ち、相手に心遣いできるように習練が必要である。そのための努力は、必ず自己実現へとつな

がっていくことであろう。

4 みだしなみの心

感じの良い挨拶ができたならば、みだしなみについて考えてみることにしよう。

人と人が出会うとき、まず第一印象が大切であることは言うまでもない。とくに職場においては、応対における第一印象によって商談の行方も左右される。つまり、その会社の信用にまでつながっていくのである。まず、一見して印象の強い、化粧や服装等のみだしなみに気を配ることが必要である。秘書として、相手に不快感を与えないよう、さりげない、清潔感のある印象が大事であることは言うまでもないが、みだしなみとしての化粧や、服装に関してもう少しくわしく広い視野から考えてみることにしよう。

(化粧)

化粧は大陸から諸文化の伝来とともに、隋や唐の時代に発達した化粧法が朝鮮半島をへて伝えられた。平安朝のころからわが国でも化粧品が普及がみられるようになり、上流社会から中流社会へ、さらに庶民階級へと及んでいった。平安風俗が鎌倉、室町の武家風俗へ、やがて徳川期になり、町人文化の発達とともに化粧は市井の男女の欠くべからざるみだしなみになった。明治維新になり、欧風の化粧法が入ってきて、今日に至るまで研究され、著しい発展を見ている。時代や国を越えて美を求める心は、人間本来の性ともいえよう。

ここでは伝書「女中手鏡」から化粧に関する部分を抜粋して考えてみよう。この伝書は、江戸時代の大名の姫君のために女性の躰の教科書のようなものとして記されたものである。時代

が大きく変化している中で、これらをそのまま使って良いとしているのではない。この中から、現代に欠けている心の部分を感じとる手掛かりとなることを期待したい。

「今朝に及びたらんにその姿にて君主父母に對面するまじき事 對面に及ぶには 御けわい(化粧) 候うてあるべく候う これ第一女子の嗜(たしなみ) たるべし」

この文章は、たしなみとしての化粧を教えているのである。このたしなみと言う意味については後でまとめてみたい。

「御けわいの事 薄薄と遊ばされよ ことに御鼻口びるに御心添えられずば 見苦しきものに候う かならずしも はきはきと白くあるべからず ぼげやかに薄薄と御めぐい しろじろしききはに あかあかとあそばされ候うこと 去りとは 公界をも御覧じなきか または 御嗜のあしかるべきと かたはらに 人の沙汰る候うも 歌て敷く よくよく御心添えられまいらせ候うべし」

ここでは、化粧は薄化粧が良いとし、特に鼻や唇にポイントをおき、真っ白にぬり真っ赤な口紅をつけたような厚化粧を戒めている。これは公の場での心得として大切で、たしなみのないことが、噂話にのぼらないよう注意せよと教えている。ここでも「目に立つならばそれも不躰」の歌に見られるように、目立たないようにそして、大切な部分にはきちんと心を配ることを教えている。

「昼の御姿 昼は御けはい改め候うてよく御入候 朝より昼までの間には かならずおんけはいも散り 御髪も乱れ 見苦しくなり候」

と延べ、朝の化粧も昼頃になると、必ずくずれてくるし、髪も乱れて見苦しいので化粧直し

せよといっているのである。

「夕べに及び候うとも御髪かきなで 御まゆの散りたるをも御直し御姿見にて御うつり候う御出で候え」

これは、夕方になると、さらに乱れるので、姿見に映し、眉墨をひき、髪や衣服を整えるよう教えている。この様に、うっすらと品位のある化粧を美しいとしたこと、またその頃の女性が、人前において自分を律してゆく生き方が、化粧一つ取り上げても読み取ることができる。これは、いつも人が相手の秘書業務における心構えとしても、決して古いものとして捨て去ることができない要諦である。

現在化粧は急激なファッション業界の発展に合わせ年々新しい化粧法が開発され、美への追及はとどまるところを知らない。緑の黒髪、赤き唇などは死語に近く、髪は自由に染められ、唇、爪などあらゆる色が登場してきた。おしゃれを楽しむことは、心の豊かさにもつながり、すばらしいことである。洗練されたトータルファッションは、見えていても気持ちがよいし、国際的視野にたっても、日本のファッション感覚は水準の高いものである。

しかし、その取り入れ方を間違えると、心の乱れにもつながりかねないことを憂慮するのである。街に出ると長い髪を後ろに束ねて、耳にはピアスをしている男性がいるかと思うと、短く刈り込んだ黄色の髪のジーンズ姿の女性もいる。さて職業はと思うと高校生だったりする。このようなおしゃれは、みだしなみという意味からはほど遠いものである。ここにみだしなみとしての昔の男性の化粧に関するおもしろい例があるので、取り上げてみよう。

「葉隠れ」に書かれている戦国時代から江戸

初期の頃の佐賀藩の侍たちは、当時京都や江戸を見たこともないほど粗野であった。大名行列のときも、他の藩は背丈も揃えて並ぶのに、そんな事はお構いなしで、行列はでたらめ、足並みも揃わず、しかも醜男ばかりとお姫様が嘆いていたという。

ところがその佐賀藩の侍が、朝起きるとまず湯浴みして、身体を清め、必ず下着を取り替える。手の爪を切り、軽石で磨き、とくさできれいにする。そして月代を剃って、鬢に丁字油をつけ、身支度を整えて出る。また、顔色の悪いときは頬紅を使い、手鏡を持っていたという。

これから見ると、戦国の世にあって、死と背中合わせに過ごしている武士にとって、当然死にのぞむ覚悟があるはずであるが、いつ死に直面しても乱れず立派だったという。武士の誇りとしての心構えや切りの姿勢が、このような生活習慣を生み、作法となったのであろう。

こうして見ていくと、みだしなみが単なる外見だけのおしゃれとは違うことに気付くであろう。それぞれが自分の生き方をしっかり見つけ、その中でどのように自分を表現していくかと言う心構えでのぞむことではないだろうか。逆にいえば、化粧ひとつでその人の生きる姿勢までのぞかれてしまうのである。

(服装)

つぎに、服装について考えてみよう。

職場における服装に関しては、制服が定められている場合が多い。それらは、それぞれの職場や仕事の内容に合わせて慎重に選んであるはずである。それは、視覚から受ける企業イメージに、大きな影響をあたえるからである。したがって、職場にあっては、定められた制服を清潔に着こなすことが大切であることはいまでもな

い。同じ制服を着用することによって職場での連帯感が生まれる事もあり、制服に着替える事が、日常の生活から働く場への心の切り替えにもなり、就業意欲を起す効果にもつながるのである。服装が、心の動きにも影響を与える事がはっきりうかがえる。

それでは、秘書業務の現場でも必要になってくる冠婚葬祭における服装の部分を、「伝書」から抜き出し考えてみることにする。まず「婚」に関する部分からみたいと思う。

現代の若者たちの結婚観は、戦前の家と家との結合がうすれ、個人と個人の結び付きという思想が定着してきた結果大きく変化している。1997年度の統計によると、離婚率は1000人あたり1.78と過去最高を記録した。女性の自立が叫ばれて、社会で活躍する女性が増えた事にも起因するかもしれないが、ここでも夫婦のお互いの心づかいが稀薄になってきて、自己中心的な考えの結果によるところも多いのではないだろうか。

結婚式も古い形式にこだわらず、人前結婚式のような形式がふえ、仲人をたてない形式も多くなってきている。社会の変化にともない当然形は変わっていくのだろうが、ここでもう一度歴史を振り返って結婚式の服装から、稀薄になってきた心を見つけ、その神髄を再発見したいものである。

現在でも結婚式に白いウェディングドレスを夢見る女性は少なくないと思う。日本的な女性であれば白無垢の花嫁衣装もよいだろう。では、なぜ白い衣装をきるのか考えてみたい。一般には、純白な清らかな気持ちで嫁ぎ、相手の色に染まるようにとお色直しをする等と言われているようである。

日本では、古来より生活をするうえで「褻の日」と「晴の日」という呼び方がある。「褻」とは、普段、日常の仕事をする日のことであり、「晴」とは、冠婚葬祭、人生の節目の行事にあたる特別の日のことである。「晴」の日には、朝から禊して心身を清め汚れの無い着物つまり白衣をきた。それによって、生命力、生活力を得ることができると考えられていた。この白衣こそ、神事や祝着に着用する晴れ着であり、花嫁衣装である。伝書に、花嫁が、里から輿で出るときのようなすが書かれていて興味深い。

「嫁入りは惣別死にたる物のまねをするなり
輿も蓐よりよせ白物を着せて出すなり さて
輿出で候えば門火をなど焼くこと肝要なり」

つまり、死装束である白無垢を着て、現在では盆の行事に祖霊を送るのにみられる門火を焚き、親や家と縁を切って結婚式に望む花嫁の覚悟が大事であるといっている。結婚式の参列者は、白い服装を避けるといわれているのはこのような所以であろう。参列者は、祝う気持ちを示さなければならぬわけで、その気持ちは花嫁と同じであるはずがない。したがって参列者は祝う気持ちを示すため、一華を添える—という言葉もあるように、普段より華やいだ服装でその喜びを示すわけである。

次に『葬』に関する部分を見てみよう。近親者に不幸があったとき、一定の期間喪に服するのがしきたりになっている。これを「喪中」というが、他人との面会を避ける「忌」と、神事を遠慮する「服」とに別れ、日数、期間が定められている。このような時に着用するのを喪服というが、本来、白でも黒でも喪のかかっている人が、「死者の汚れが移っているので、人様にお会いすることはご遠慮します」という意

味のコもった慎みの服であった。

例えば、平安時代は、灰色のような鈍色が喪の色とされ、喪服に使われていた。そこで、甲問者はその上に青い薄物を着て出かけた。そのようにすると、鈍色がほのかに透けて見え、「ご親族と同じように心のなかは喪に服していますよ」という心の表現になったのである。これが「心喪の服」といわれる風習である。しかし、歴史の移り変わる中で、明治以降は、悲しみを表現する意味として黒を着ることが礼儀として定着している。

こうしてみていくと、服装は、相手に対する心の表現として着用されていることに気付く。したがって、これをおろそかにすることは、相手に対する気持ちがこもっていないとし、その人の人間性までも判断されかねないのである。この様に、時と場合に合わせた服装を整えるということは、人を大切に思う心が自然に備わるのである。

重要な儀式のときに軽々しい服装であれば、その場の内容まで軽く感じられてしまうし、またその逆に、軽やかに楽しみたいときに正装でこられても困るのである。したがって、周囲に相合わせると言う事も必要になってくる。一人だけきらびやかにしていても礼儀にはかかっていないのである。この様に、いわゆるT・P・Oに応じた服装ができてはじめて、みだしなみが整うのである。もちろん、それに合わせ、靴など小物ずかいかにも気を配る必要がある。一足元をみられる—という言葉があるが、これも、生き方にかかわっている内容をともなって残されている。禅語にみる「脚下照顧」という教えにもつながってこよう。

5 美意識によるみだしなみ

ここで、日本人の美意識によるおしゃれの本質を伝書から拾ってみることにしたい。

「御小袖引き合わせのこと 御襟に心をとめ候はねば いかにも美しき襟つきにても 見苦しきもの也 御胸の合せ目 いとやわらかに御召し候へ 裾広く御入り候うて裾のけまわし 亦ははしたがましき事も 我知らず出る事もやあるべし 専一御心ゆるさせ給うな 御心だに忘れさせ給はねば余に見にくき御事は有まじく御入候べし」

これは、小袖の着付けについて書かれているものである。襟元に気を配り、合わせ目は自然にやわらかく着付け、裾をあまり長くするとそそうをして足など見るとはしたないので、歩き方（けまわし）にも気をつける事を教え、着付から立ち居振る舞いまで及んでいる。

「襟元を正す」という言葉があるように、襟元は、着付けのポイントであるが、精神のありようを示す言葉として伝わっていることは、逆にみだしなみとしての大切な部分ということである。

「御香ひとめさせられ候所 取わけすそ 袖こし振り第一に候 又御やどり前 または朝など かならずにほひとめ申す事 女子に限らず表かたにもあり候べし」【女中手鏡】

「若き人は髪にも小袖にもこおりおり沈をたきてしかるべく候、ただし強く匂い候は尾籠に候 又男はたき物をば用いず候。老若ともにくわっ香 丁字 四季ともに用いてよく候」【大双紙】

ここでは香りのみだしなみを教えている。現代は香水やオーデオロン等ありとあらゆる香りが自由に楽しめるが、この頃は、沈香とって、

天然の木から得る香りであった。伝書によると「蚊の脚ほどに細く削り…」とあるが、それを衣装や髪にたきこめたのである。動きのある所へ付けると良いとし、余所へ泊まる時や、朝には必ずたきこめるとされていた。

また、男性は、老若ともにくわっ香や丁字などをそのまま身につけていた。しかし、ここでもあまりわかるほど強い匂いはたしなめている。ここにも日本人の慎みの美学が感じられる。

日本人は体臭は余りないと聞かすが、ある外国人が、日本人は醤油の匂いがすると言ったという話も聞く。又若者、老人、男女の体臭がそれぞれあることも確かである。そうであれば、ほのかな香りのみだしなみも周囲への心遣いとしておろそかにできないであろう。あくまでも目立たず、さりげなく取り入れる事が大切であろう。

「人の衣装の色々 すべて若き人も としの程より すこしくすみて出立たれ候が能く候よし申し伝え候 人の若くと出立ち候は、にやわらず（似合わず）候なり」

「老若などは、自然黒鉢巻することばさりにあれば苦しからず…白髪に黒きをして面白きと申し候」

「帷子（夏の薄物）の事辻が花（当時流行した染色）はく（金箔、銀箔）などは 女房 児など 若衆などは苦しからず候が 年たけたる男は然るべからず候 ただ男は若きも老いたるも白の帷子似合い候」

「年寄りたる人 すき素襖に 紅梅など着られ候事 さも候」【大双子】

これは、武家社会におけるおしゃれ感がうかがえる部分である。

衣装の色は、年齢よりすこし地味めのものを

よしとし、若づくりをして目立つことをいまして、また、流行の派手なものや、箔などのきらびやかなものは、女性や、こども、若い者はよいが、一人前の男性が着る物ではないとし、白帷子が似合うといっている。

質実剛健の時代の精神性をおしゃれの中にも感じられることは、興味がある。高齢者のおしゃれにおよぶと、また違った粋なくだりがある。戦場におもむく時は、慎みとは逆に目立ついでたちをよしとされていたようである。

たとえば鉢巻きは、老若問わず黒色が良いとされたが、白髪にははっきりと目立ち面白くと評価し、透けて見えるすき素襖の下に、紅梅色の下着をつけるのはしゃれたこととしている。

「春の素襖、袴のこと 柳色に染め わが家の紋をつけ 柳を大形にするなり」

「夏の上下のこと 地を水色に染め 松を大形にするなり」

「秋の上下のこと 鶺鴒色 本なり」

「冬の上下のこと 黒きが本なり」

【万簾方之次第】

これらは、季節に合わせた衣装の色について書かれている。春は、草木の萌え出ずる季節、柳の芽吹く色を着ることで気持ちも新たになる。夏の暑さには、涼しそうな水色とし、ものみな澄む秋は黄色、冬は黒色を着て寒さを凌いだのである。

日本の文化は、この美しい四季の恵みが基調をなしていると言っても過言ではないであろう。衣装にも、季節感を取り入れることを忘れてはいない。

本稿では、ほんの一部を取り上げただけではあるが、おしゃれの心遣いが、礼儀のひとつとして、年齢により、時代精神により、季節によ

り、時と場合によって、細やかに書かれていることに、日本文化の美意識の高さを感じさせられる。

この項では、日本人の美意識と思想を簡単に取り上げてみたが、みだしなみというものが、たんなる外見だけにとどまらないということが理解できたのではないだろうか。このような美意識とみだしなみは、秘書実務という職務を通して、自分を磨き、自己の改革をめざして、より高い人間性を追及していく中で、自ずから備わっていくのであろう。

おわりに

本稿では簡単ではあるが、「秘書実務」教育という立場から、日本の長い歴史の中で育まれてきた、日本人の心と形の相互関係を考察し、一部分ではあるが、実践の場において役立つようまとめてみた。

日本人の生活のあらゆる面において、守り伝えられて来た礼儀作法の中には、時代を越えて、人間として最も大切な、相手のことを思いやる「心遣い」が、基本精神として学ぶ事ができる。現代社会において稀薄になりつつある人間関係を、少しでも回復する手掛かりになる事を期待したい。

小笠原流第32代の当主である、故 小笠原忠統氏は、小笠原家に伝わる「伝書」を研究し、公開した。日本文化の中で礼法が占めてきた歴史的役割を知らせ、小笠原流礼法宗家として、日本伝統の礼法の心を、現代のマナーに生かすための研究に従事し、多くの業績を残した。

小笠原氏は、そのきっかけとなった気持ちを「礼儀やしつけの空白が、心の荒廃をもたらしているのではないかと憂慮する一方、800年と

いう時を超えて伝えられてきた、礼法の一体系を埋もれさすのに忍びず、なんとかこれを、日本文化の財産の一つとして未来に生かし、継承することができないものかという考えもあって…」と記している。

私は、この宗家である小笠原忠統氏に、小笠原流礼法の教を授かる機会に恵まれ、多くの『伝書』の心を学ばせて頂き、新しい時代への光明を見出すことができた。この幸せを心に

刻み、深い感謝の念に絶えない。

しかし、残念ながら小笠原忠統氏は、その志を次世代に託し、1996年、享年77歳で他界された。偶然にも最後となった講義で、新しい時代に即した礼儀について論文をまとめるようにと、言い残されたのである。微力ではあるが、「秘書実務」における今後の研究を通して、師の意志を継承できれば幸いである。

参考文献

- 小笠原忠統「小笠原礼書」1973（現代史出版会）
「日本人の礼儀と心」1978（ダン社）
「礼法入門」1996（M&S）
森脇道子編著「秘書実務」1995（建帛社）